

鳥取県米子市

YONAGOJYOSEKI

米子城跡 22 遺跡

1998. 3

建設省倉吉工事事務所
財団法人 米子市教育文化事業団

例　　言

- 1 本書は鳥取県米子市加茂町2丁目地内において実施した国道9号線米子地区電線共同溝建設工事に伴う米子城跡2次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は建設省の委託を受けて（財）米子市教育文化事業団が実施した。
- 3 調査は（財）米子市教育文化事業団調査員 佐伯純也、米子市教育委員会 下高彌哉が担当した。
- 4 本書に用いた方位は第1図が磁北である以外は全て座標北（G, N）を示し、標高は標準海拔高度である。座標値は四十座標第V系を用いた。
- 5 第1図は米子・境港都市計画計画図27（米子市）を複写、縮小し、加筆したものである。
- 6 遺物の番号は本文、図、表、写真とも対応している。
- 7 本書は佐伯が執筆、叢集した。
- 8 出土遺物、実測図、写真は米子市教育委員会が保管している。
- 9 視地調査及び報告書の作成にあたっては下記の方々にご教示・ご協力を頂いた。記して感謝いたします。
村上勇、湯村功、中森祥、濱田竜彦、浜隆造。（敬称略）

本文目次

1 調査の概要	1
2 位置と環境	1
3 米子城小史	2
4 1トレンチの調査	3
5 2トレンチの調査	3
6 3トレンチの調査	3
7 4トレンチの調査	6
8 5トレンチの調査	11
9 まとめ	12
10 土器器皿觀察表	12
11 陶磁器觀察表	13
12 上器・陶磁器集計表	14

挿図目次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 トレンチ配置図	2
第3図 1トレンチ出土遺物	3
第4図 3トレンチ断面図	4
第5図 3トレンチ出土遺物	5
第6図 4トレンチ平・断面図	7～8
第7図 4トレンチ出土遺物	9
第8図 4トレンチ出土遺物	10
第9図 5トレンチ平・断面図	11

1 調査の概要

米子城跡 22 遺跡は、建設者が実施する国道 9 号線米子地区電線共同溝の建設工事に先立って平成 9 年度に発掘調査された遺跡である。調査は建設省の委託を受けて、米子市教育委員会の協力のもとに財団法人米子市教育文化事業団が実施した。調査地は、加茂町 2 丁目地内に所在し、調査面積は 1 300 m² を対象とした。調査にあたっては、調査区を 5 つのトレンチに分け、1 トレンチより順次調査を行った。発掘調査は、現地作業に平成 9 年 1 月 10 日から 1 月 29 日までの期間を要し、整理作業は平成 10 年 3 月 31 日に終了した。

2 位置と環境

米子城跡は、鳥取県米子市の市街地一帯に所在する近世の城郭遺跡である。城跡は、防衛の拠点であり行政区でもある内郭と、武士の生活域である外郭に分けられ、近世山陰道に沿う形で作られた町人街と、寺院を一直線に配置した寺町に区分される。このうち、現在までに発掘調査が行われているのがほぼ外郭区域に限られ、その他の区域の実態についてはよく分かっていない。遺跡の現況は、内郭は建物などが明治初期に解体され、現在は石垣を残すのみとなっている。一方、外郭は市街化が進み、近世米子城の面影は、道路割りなどにわずかにみとめられるにすぎない。



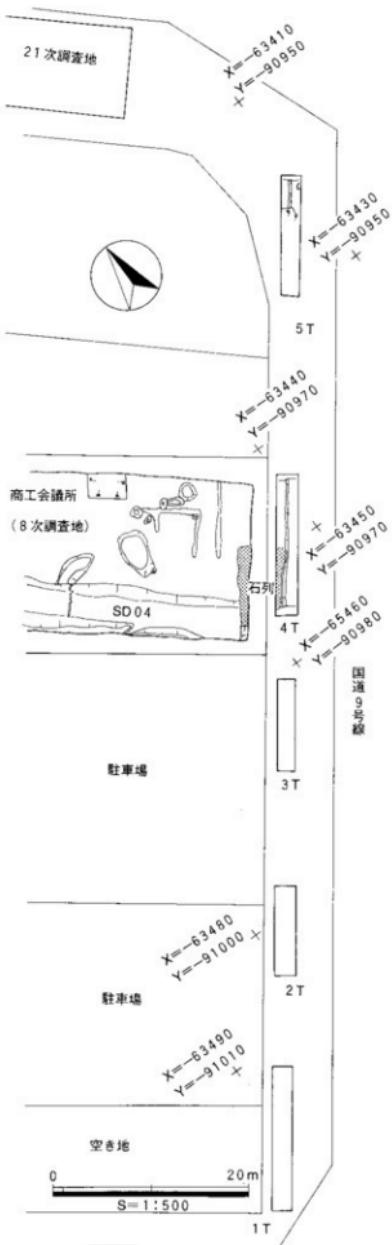
第 1 図 調査地及び周辺遺跡分布図

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1. 米子城跡22遺跡 | 2. 久米第一遺跡 | 3. 米子城跡1遺跡 |
| 4. 米子城跡2遺跡 | 5. 米子城跡3遺跡 | 6. 米子城跡4遺跡 |
| 7. 米子城跡5遺跡 | 8. 米子城跡6遺跡 | 9. 米子城跡7遺跡 |
| 10. 米子城跡8遺跡 | 11. 米子城跡9遺跡 | |

3 米子城小史

米子城は、1467年頃に山名宗幸が米子飯山に砦を築いたのが始まりとされる。このころ米子は伯耆・出雲両国の国境に位置し、軍事上の要衝として重視されていたため、しばしば山名、尼子両氏の戦いの場となっていた。1591年には西伯耆・東出雲・隱岐12万石を領有した吉川広家によって湊山に築城が始まられ、1600年には伯耆18万石の領主として中村一忠が入城したが、その頃はまだ米子城は完成しておらず、しばらくは尾高城に滞在したという。その後、中村氏が断絶すると、1610年加藤貞泰、1617年池田由之を経て、1632年より池田家家老、荒尾氏による自分手政治が行われ、以後1869年まで続いた。明治維新後、城の土地建物は土族に払い下げられた後に売却され、天主閣などは明治10年頃までに解体された。また江戸時代の武家屋敷は小原家の長屋門が米子城二の丸に移築、保存されているのみで、ほかは全く現存していない。

調査地は、享保5年（1720年）に作られた絵図から、城への主幹道路と臼井金エ門、伊木小治郎屋敷の境界にあたるものと考えられた。安永・天明年間（1772～88年）の絵図では、臼井家から國田家に変わり、安政年間（1854～59年）の絵図では伊木家の地点が空き地となり、明治3年（1870年）には山本家の敷地となっている。明治中頃以降は、調査地一帯は水田となっていた。このうち、8次調査では、臼井・伊木両家の屋敷境界とみられる水路跡と、山本家の拡張に伴う整地土層と石列を確認しており、絵図の記述を裏付けている。



第2図 トレンチ配置図

4 1 トレンチの調査

このトレンチは、長さ1.5m、幅約2.2mの範囲に設定し、深さ約2mまで調査したが、近現代の搅乱により、遺構は全て失われていた。遺物は、下層の黒色土中から須恵器の壺体部片（第3図、1）が1点のみ出土している。



第3図 1 トレンチ出土遺物

5 2 トレンチの調査

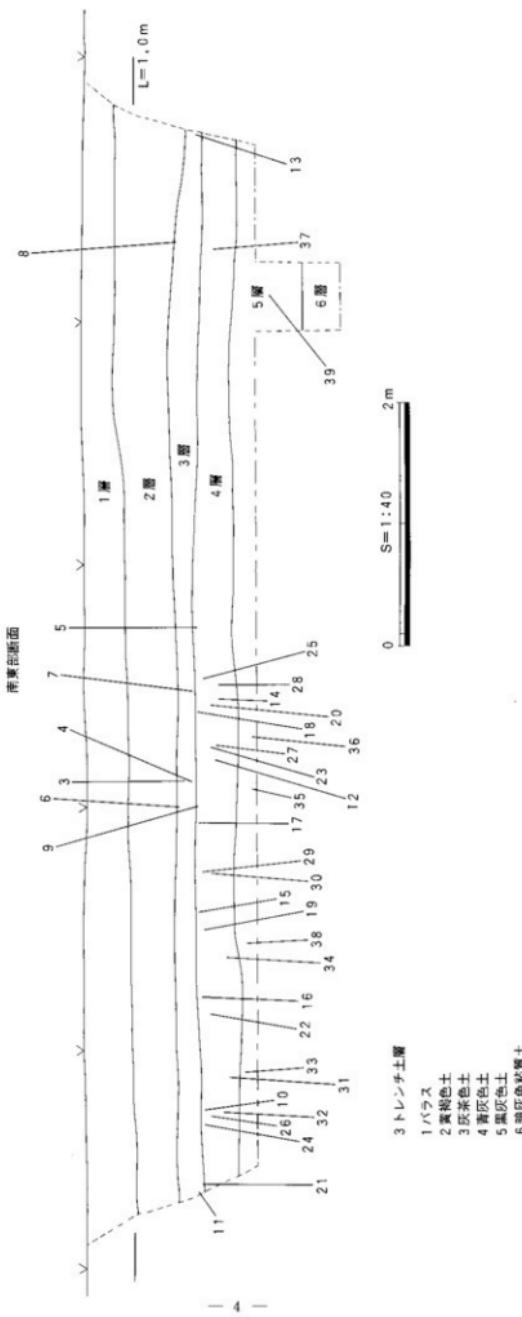
調査地は、旧米子水道局の跡地にあたる。トレンチは、長さ9.5m、幅2.2mの範囲に設定した。深さ約2mまでを調査したが、水道局建物の建設、解体時の搅乱により、遺構は全て失われていた。遺物は搅乱土中から陶磁器片を5点採集した。

6 3 トレンチの調査（第4図）

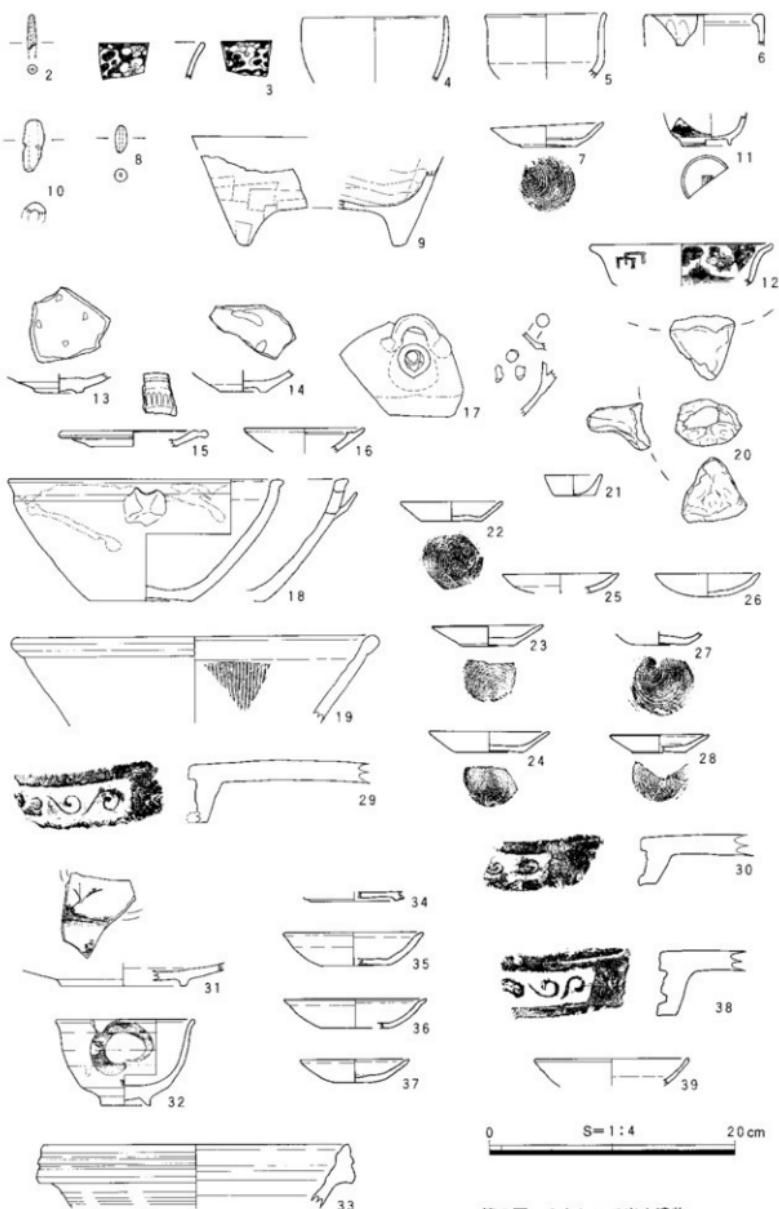
長さ9.7m、幅1.9mのトレンチを設定した。調査は、安全性を考慮して、現地表面から深さ約1.4mまでに止め、それ以下は断面を行い、土層の堆積状況を確認した。基本層序は6層に分かれ、1・2層は、明治から現代に属し、3層以下が近世から明治初期までの堆積である。6層からは遺物が出土せず時期を特定できなかった。遺物の取り上げは、3・4・5層の掘り下げ中に、深度別に3段階に分けて行った。遺物を検討した結果、これらの層の年代は、3層が幕末から明治初期に、4層が18世紀後半から幕末に、5層が16世紀後半から17世紀前半に相当するものと思われる。この地点は、安永・天明年間（1772～88年）に作られた絵図『新修米子市史・第12卷』を参照）から、伊木家屋敷の東南部角に当たり、南東部に位置する道路との区画、及び南側の田代家との境界が接地するものと考えられたが、それらに関わる遺構は検出できなかった。

出土遺物（第5図） 土錘（2、8、10） 全て手づくね整形による。8は長さ2.2cm、直径1cmを計る。**火鉢（9）** 土師質で平面は方形を呈する。口縁は脚から斜め上方に伸びる。

小杯（21） 口径5.3cm、器高2.4cmの土師質土器。口縁の内外面とも煤が付着する。灯火具か。**取っ手状土製品（20）** 土師質鍋の取っ手か、火鉢の脚の可能性も考えられる。下面に指押さえの跡を明瞭に残す。**軒平瓦（29、30、38）** 29、30は第4層から、38は第5層から出土している。いずれも中心文様から2反転する唐草を配する。



第4図 3トレンチ土層図



第5図 3トレンチ出土遺物

7 4 トレンチの調査

8次調査区域に隣接する地区である。トレンチは長さ14.6m、幅2.2mに設定した。土層は、1・2層が近現代、3層が幕末から明治、4層が18世紀～幕末、11～13層は17世紀代の堆積である。遺構は石列と、その下層から北東一南西方向に伸びる溝を検出した。遺物は埋土、溝中より土器、陶磁器、木器、漆器碗、金属製品などが多数出土している。

検出遺構（第6図）

石列 一部搅乱されているが、トレンチの南西端部で、長さ5m、幅0.6mにわたって検出した。石の配列や検出高からみて、8次調査で検出された石列と同一のものであろう。用途は、塀の土台の根堅め石と考えられるが、幅が4mにもなるため、建物の基礎である可能性も考えられる。石は人頭台から拳大の大きさの円礫が用いられている。時期は、石列検出面で出土した土器から幕末・明治前期のものと考えられる。

溝（SD01） トレンチの北西半分で約13mにわたって検出した。遺構は17世紀の堆積層を掘込んで作られ、深さは約30cm程度である。幅は北側の肩が未検出のため不明だが、8次調査ではこの溝は検出されておらず、1.2mから3m以内と考えられる。南東側の肩部には横木がわたされ、それを固定するための杭が打ち込まれていた。また杭には竹杭も含まれていた。このような状況は8次調査で検出された水路でも確認されており、護岸を目的として行われたものである。遺物は、溝下層より磁器の碗を一点（93）と、上層より多数の土器、陶磁器、木器を検出している。また（85）が8次調査で出土した大皿（『米子城跡8』図28-242、18世紀中頃～幕末の整地土層出土）と接合したため、これらの遺物は、整地が行われた際に溝中に一括して投棄されたものと考えられる。溝とその検出面から出土している遺物は、19世紀以降のものを含んでいないことから、整地は19世紀初頭には完了していたものであろう。以上のことから、この溝は17世紀以降に作られ、18世紀末頃に埋没したものと思われる。

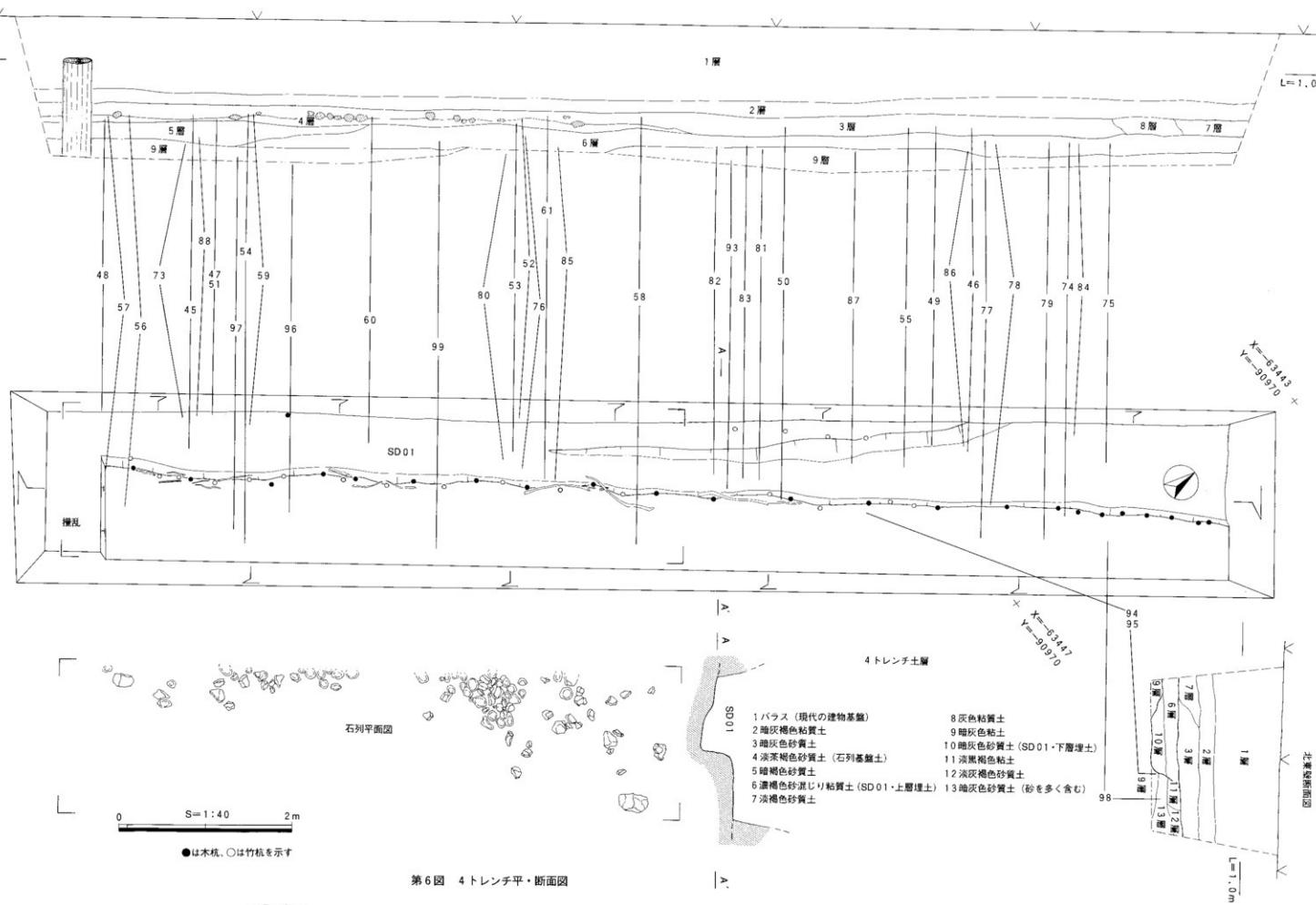
出土遺物（第7図、第8図）

釣針（66） かえりのない釣針である。同型式のものが8次調査でも出土している。かえしを丸く加工するが、末端が線状に伸びる。銅製か。

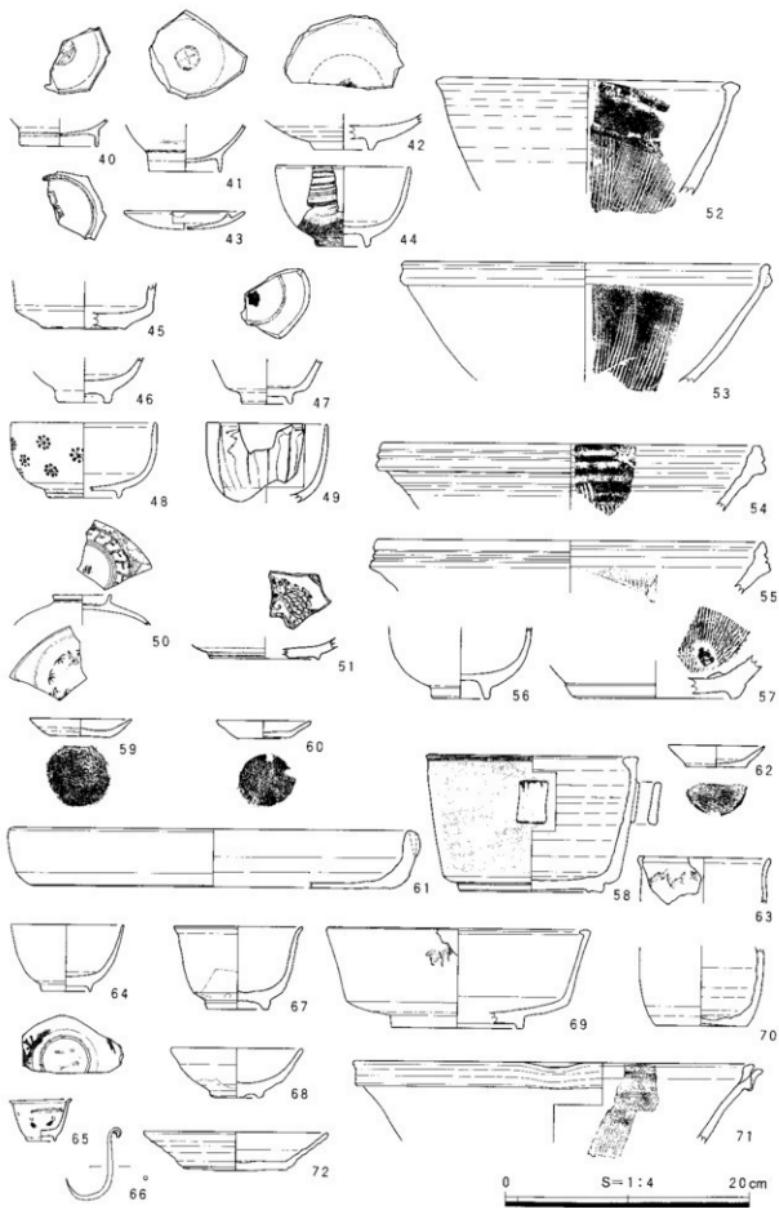
土鍤（78、99） どちらも手づくりによる。78は全長3.9cm直径1.8cm。99は全長3.5cm、直径0.8cmを計る。

下駄（89） 6次、8次調査で同型式のものが出土している。組み合わせ式で、台と歯は別の材を使用する。平面は楕円形で、一部表面に黒い塗料を塗った痕跡が認められる。歯は台形になるが、歯先の摩滅が前後の歯で均一ではない。恐らく、ある程度すり減った状態で、前後の歯を付け替えているのであろう。

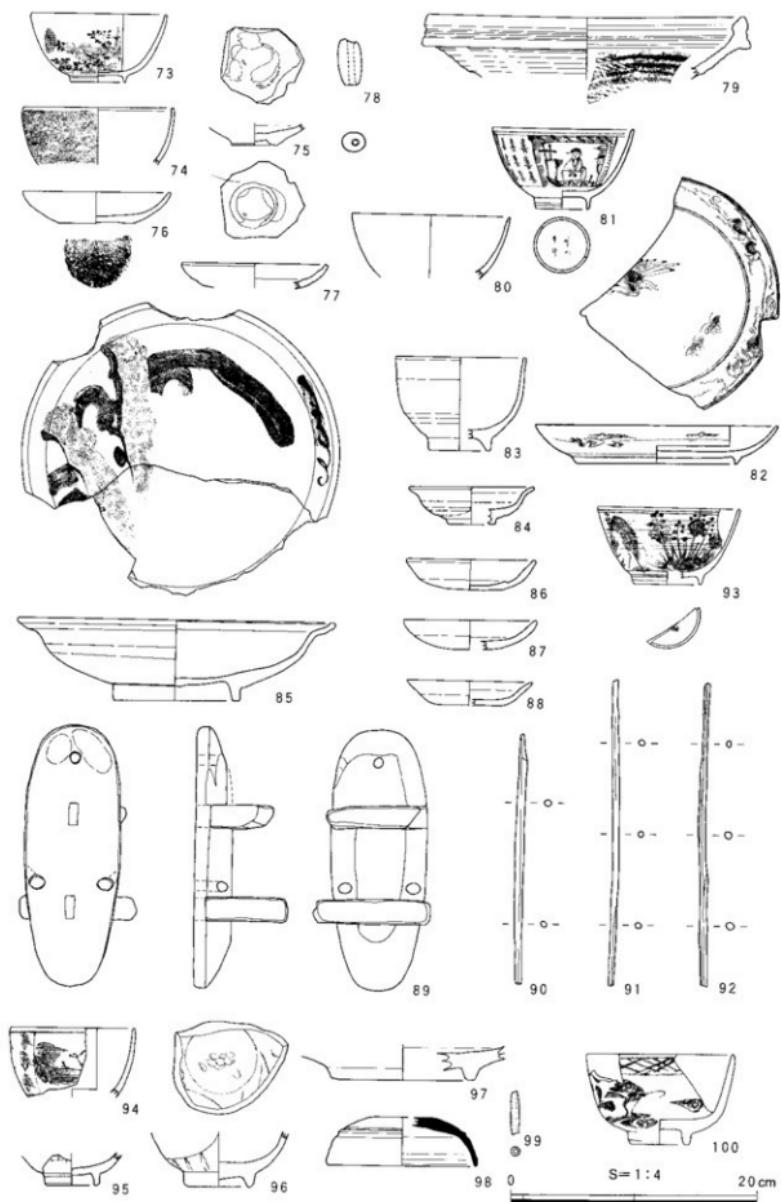
箸（90、91、92） 90は20.7cm、91は25.3cm、92は25cmを計る。



第6図 4 トレンチ平・断面図



第7図 4 トレンチ出土遺物



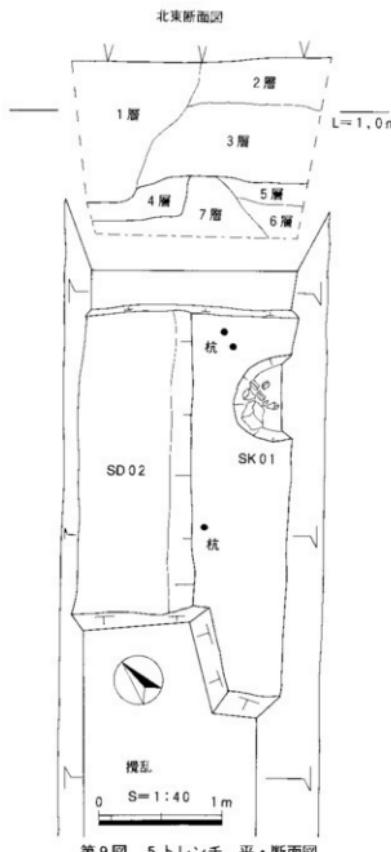
第8図 4トレンチ出土遺物

8 5 トレンチの調査 (第9図)

今回の調査範囲の最も北側に位置する、旧商工会議所建物の跡地である。トレンチは長さ12.6m、幅約2mに設定した。基本層序は3層に分かれ、造構は3層以下の、粘質土を埋込んで作られている。遺構はトレンチの北部で溝(SD 02)と土坑(SK 01)を検出した。またトレンチの北部3mより南側は、搅乱により遺構が失われていた。

検出遺構

溝(SD 02) 第3層の直下で長さ2.5m、幅約1mにわたって検出した。溝の全幅は北側の肩が調査区外にのびるため検出できていない。深さは約30cmで埋土からの遺物の出土はなかった。4トレンチのSD 01の延長線上に位置することから、これと同一の溝であろう。



第9図 5 トレンチ 平・断面図

土坑(SK 01) 全形は大半が調査区外にかかるため知り得ないが、直径約75cm、深さ30cmの円形土坑か。SD 02と同一遺構面で検出した。土器は出土しなかったが、上層に一辺5cmから20cmほどの角礫が含まれていた。遺構の時期、性格とも不明である。

出土遺物 表土掘削中に陶磁器片5点、土器片1点を採集したに止まった。いずれも搅乱土中からの出土である。また搅乱土の下層から、昭和49年発行の10円玉を検出しており、この搅乱は、それ以後に行われたものと考えられる。

5 トレンチ土層

- 1 搅乱
- 2 パラス(現代の建物基盤)
- 3 暗灰色シルト(明治期の水田耕作土)
- 4 暗黒褐色粘質土(SD 02・埋土)
- 5 黒灰色粘質土
- 7 淡黒灰色砂質土

9まとめ

屋敷境界と溝 今回の調査では、石列と、道路と屋敷の境界を示すと思われる溝（SD 01・02）を検出した。石列は8次調査で検出されていたものと同一のもので、樹の根石と仮定すれば、幕末期の屋敷の南東部境界線がほぼ確定したことになる。しかしながら、根石をそなえるような重厚な塀は一般武士の住居には不自然であるため、7次調査で確認されたような建物の基礎石とする考えが妥当ではないかと考えられる。石列の下層で検出された溝（SD 01）は、屋敷と道路の境界を示すものと思われ、このような境界の設定は米子城跡7・8・9次調査でも確認されており、屋敷境界の設定にあたって一般的に行われていたものであろう。このように屋敷地の周囲に溝が巡るのは、元来米子城下一帯が低湿な地域に立地しているためで、効率良く排水を行うためにも、溝の掘削が不可欠であったためと推察される。また、今回検出した溝を、道路の側溝として考えた場合、現国道9号線の道路側溝よりも、5mほど北西側に寄っており、現在の地割よりも北にずれる可能性が高く、現行の道路の軸や規模に関しては、近世の地割をそのまま踏襲しているとは考えにくくなる。しかし、この水路の南東部に、さらに道路と屋敷を区画する施設が存在する可能性もあり、即断は出来ない。ただし、8次調査で検出された水路（SD 04）は、今回検出された溝（SD 01）よりも南東側に伸びる可能性は少なく、18世紀中頃までの屋敷地の範囲はこれ以上は大きくならないものと思われる。また現行の道路境界が近世の地割とずれることは、溝の埋没後、その直上に基礎石を用いるような施設が築かれていることも一つの傍証となろう。

参考文献

『新修米子市史・第12巻』	米子市史編さん協議会	1997年
『伯耆米子城』	佐々木謙	1971年
『米子城跡6遺跡』	(財)鳥取県教育文化財団	1996年
『米子城跡7遺跡』	(財)米子市教育文化事業団	1996年
『米子城跡8遺跡』	(財)米子市教育文化事業団	1996年
『米子城跡9遺跡』	(財)米子市教育文化事業団	1997年

米子城跡22遺跡 出土 土器器皿 観察表

番号	出土地点	法量(cm)			胎土	色調	焼成	底部糸切り痕	備考
		口径	底径	高さ					
7	3トレス層	9.3	4.5	2.0	密	淡灰褐色	良好	有	内面に一部焼付着
22	3トレス層	8.2	5.0	1.6	密	淡褐色	良好	有	
23	3トレス層	9.0	4.0	1.7	密	淡褐色	良好	有	
24	3トレス層	9.8	5.5	1.7	密	灰褐色	良好	有	口縁部に焼付着
25	3トレス層	9.6	—	1.7	密	淡褐色	良好	無	
26	3トレス層	8.6	—	1.9	密	淡褐色	良好	無	
27	3トレス層	—	5.0	1.1	密	褐色	良好	有	
28	3トレス層	8.2	4.5	1.5	密	褐色	良好	有	口縁部に焼付着
35	3トレス層	11.4	5.4	2.7	密	淡褐色	良好	無	内面に一部焼付着
36	3トレス層	11.6	5.0	2.4	密	淡褐色	良好	無	
37	3トレス層	8.9	3.0	1.9	密	淡褐色	良好	無	
59	4トレス層	8.4	4.8	1.6	密	淡灰褐色	良好	有	口縁部に焼付着
60	3層	7.6	4.4	1.2	密	淡褐色	良好	有	口縁部に焼付着
62	石列	7.8	4.9	1.8	密	淡灰褐色	良好	有	口縁部に焼付着
72	4層	14.8	8.2	3.2	密	淡灰褐色	良好	有	
76	溝検出面	12.0	6.3	2.6	密	淡灰褐色	良好	有	
77	溝検出面	11.8	—	2.0	密	淡褐色	良好	不明	口縁部に焼付着
86	溝埋土	10.3	—	2.6	密	淡褐色	良好	無	外而スリップ技法
87	溝埋土	10.5	—	2.4	密	暗灰色	良好	無	風化著しく、器壁剥離している。
88	溝埋土	10.4	—	2.0	密	淡褐色	良好	無	

米子城 22 遺跡 出土陶磁器 観察表

番号	種別	器種	法量(cm)		出土地点	備考	時期
			口径	底径			
1	須恵器	—	—	—	1トレス上	裏体墨か。外面に朱色の輪がかかる。	不明
3	磁器	小鉢	—	—	3トレス3層	肥前系。多角形の小鉢。内外面墨と花文を描く。	V~
4	陶器	碗	—	—	11.5	3層 在地系。光沢のある淡緑色を呈する。胎は灰色。	V
5	陶器	瓶	9.6	—	3層	肥前系、京焼風陶器。口縁部ややくびれて侈方に伸びる。	Ⅲ
6	陶器	不明	9.0	—	3層	肥前系。表面はらちりし黒褐色の輪を描ける。	V~
11	磁器	碗	—	3.8	—	4層 肥前系。表面墨か。高台内に銘有り。	IV
12	磁器	皿	14.8	—	—	4層 肥前系。斑紋か。高台内に銘有り。	V
13	陶器	皿	—	4.0	—	4層 肥前系。表面墨か。高台内に銘有り。	I
14	陶器	皿	—	3.8	—	4層 肥前系。表面墨か。高台内に銘有り。	II
15	陶器	皿	11.6	—	—	4層 肥前系。表面墨か。高台内に銘有り。	I
16	陶器	油皿皿	9.6	—	—	4層 在地系。外面上半は抹黑色、下半分は淡茶色。内面は白褐色を呈する。	V~
17	陶器	土瓶	—	—	4層 在地系。外面上半は抹黑色、下半分は淡茶色。内面は白褐色を呈する。	II	
18	陶器	片口	22.2	8.6	10.0	4層 肥前系。外面上半は抹黑色、下半分は淡茶色。内面は白褐色を呈する。	V~
19	陶器	福鉢	29.2	—	—	4層 在地系。表面墨色で足部がある。	V~
31	磁器	皿	—	10.3	—	5層 肥前系。高台付にゆ少腹付。胎は灰褐色を呈する。	II
32	陶器	碗	11.2	3.8	7.1	5層 唐津。外側に鉄輪で足を描く。	I
33	陶器	福鉢	24.5	—	—	5層 肥前系。口縁外側に2条の開闊めぐる。	I
34	陶器	皿	—	6.8	—	5層 肥前系。口縁外側に2条の開闊めぐる。朝鮮系。李朝。内面も光沢ある暗緑色を呈する。ロゴ様底付若。	I
39	陶器	皿	12.6	—	—	たちあり 朝鮮系。李朝。内面も光沢ある暗緑色を呈する。ロゴ様底付若。	I
40	磁器	碗	—	6.2	—	4トレス2層 肥前系。灰褐色。見込みと高台に銘有り。	V
41	磁器	碗	—	6.0	—	1・2層 肥前系。灰褐色。見込みに十字を彫る。	V
42	磁器	皿	—	—	—	1・2層 肥前系。見込みを斜めに彫刻ぎし。コニック印押による五弁花文を押す。	IV~V
43	陶器	油皿皿	9.6	—	—	1・2層 在地系。? 灯明受け窓。全体に赤みを帯びる。	V~
44	陶器	碗	10.8	4.0	6.6	1・2層 肥前系。胎上に赤みがかった黒色。	IV
45	磁器	香炉	—	6.8	—	3層 肥前系。蛇の目四形高台鉄輪造り、内面は赤い発色する。	III
46	磁器	瓶	—	4.3	—	3層 山田窯。透明感のある青緑色を呈する。高台脚輪付若。	IV
47	磁器	瓶	—	—	—	3層 肥前系。外側墨。見込みにコニック印押による五弁花文。	IV
48	磁器	益母草瓶	11.8	5.8	6.2	3層 肥前系。口縁外側に2条の開闊めぐる。外側に梅花文を散らす。	IV
49	磁器	碗	—	9.9	—	3層 肥前系。瓶火内の中央に桟を描く。	III
50	磁器	蓋	—	4.8	—	3層 肥前系。つまみ卜面に記号あり。外側に花と唐文、内面に松竹梅を描く。	V
51	磁器	皿	—	9.0	—	3層 肥前系。蛇の目四形高台。内面に花文を描く。	IV~
52	陶器	福鉢	23.4	—	—	3層 地處不明。川穂部は「丁」字を彫る。胎は赤く瓦色を含む。	不明
53	陶器	福鉢	28.5	—	—	3層 栗代佐賀。口縁に突然墨垂け付ける。内外面墨緑色。胎は著しく麻溝。	V
54	陶器	福鉢	30.0	—	—	3層 肥前系。外側墨。見込みにコニック印押による五弁花文。	I
55	陶器	福鉢	31.4	—	—	3層 肥前系。口縁外側に2条の開闊めぐる。ロジンは茶色に発色。	I
56	陶器	碗	—	4.0	—	3層 肥前系。胎上に少しだけ黄色を呈し、貯金が見られる。高台付に少量の跡が付す。	V~
57	陶器	福鉢	—	12.8	—	3層 在地系。内面、高台内無釉。外面は淡白色の輪を描ける。	V~
58	陶器	不明	16.2	11.8	11.6	3層 在地系。内面、高台内無釉。外面は淡白色の輪を描ける。	V~
63	陶器	碗	—	10.5	—	石井 肥前。京焼風陶器。	III
64	磁器	碗	9.1	3.1	5.5	4層 肥前系。高台内に「□年製」の銘有り。	IV
65	磁器	小杯	4.9	2.2	3.5	4層 肥前系。高台内に「□年製」の銘有り。	IV~V
67	陶器	碗	10.4	5.0	6.8	4層 肥前系。胎は黄褐色を呈する。	I
68	陶器	皿	10.5	3.5	4.1	4層 肥前系。胎は黄褐色を呈する。	I
69	陶器	鉢	19.8	10.6	8.2	4層 肥前系。外面に山水文を描く。	V~
70	陶器	瓶	—	7.4	—	4層 肥前系。胎は黄褐色を呈する。	不明
71	陶器	福鉢	32.4	—	—	肥前系。口縁に草花文を描く。	II
73	磁器	碗	11.6	4.4	4.6	満絵出窓 肥前系。外面に草花文を描く。	IV
74	磁器	碗	12.2	—	—	満絵出窓 肥前系。外表面輪。	IV~
75	陶器	皿	—	3.2	—	満絵出窓 肥前系。胎は白褐色。高台無墨。身自り。高台は糸切り後内面削り出し。	II
79	陶器	福鉢	25.4	—	—	満絵出窓 肥前系。口縁外側に2条の開闊めぐる。	I
80	磁器	碗	12.9	—	—	満絵出窓 肥前系。内面に鳥と昆虫を描く。縁際に墨書きによる紋様有り。高台内針支。	IV
81	磁器	碗	11.5	4.2	6.8	満上層 高台内に「正保年製」の銘有り。画面内に舟の二舟入と文様化した舟を描く。	III
82	磁器	皿	19.8	13.0	3.2	満上層 肥前系。内面に鳥と昆虫を描く。	IV
83	陶器	皿	10.7	5.0	7.7	満上層 肥前系。高台内针支。	IV
84	陶器	皿	10.0	3.0	3.1	満上層 肥前系。胎は白褐色。	II
85	陶器	皿	25.4	10.0	6.7	満上層 肥前系。胎は白褐色。	不明
93	磁器	碗	11.6	5.4	6.3	神下唇 縁と卓花を描く。高台内に「明」の字有り。	不明
94	磁器	碗	10.1	—	—	11~13層 肥前系。縁と卓花を描く。高台内に「明」の字有り。	IV
95	磁器	碗	—	4.2	—	11~13層 肥前系。縁と卓花を描く。高台内に砂有り。	III
96	磁器	碗	—	5.2	—	11~13層 中国、能楽茶碗。青磁漫文碗。4.4 cm~1.5 cm前半。	II?
97	陶器	皿	—	10.8	—	11~13層 肥前系。底地不明。高脚豪付。	II?
98	須恵器	环蓋	11.2	—	4	11~13層 T K 4.3。除却IV相当する。6世紀中期。	IV
100	磁器	碗	11.8	4.8	7.4	たちあり 海物。口縁外側に西方釋文、体部に篆文を描く。	IV

I期···16世紀後半~17世紀初頭

IV期···17世紀後半~18世紀後半

II期···17世紀前半

V期···18世紀後半~幕末

III期···17世紀半ば~17世紀後半

VI期···幕末~明治

米子城跡 22 遺跡出土陶磁器集計表

地 区	磁器	陶器	土器	合計
1 ドレンチ	0	0	0	0
2 ドレンチ	1	1	3	5
3 ドレンチ	84	189	138	411
4 ドレンチ	155	183	117	455
5 ドレンチ	4	1	1	6
出土地区不明	12	12	13	37
合 計	256	386	272	914

3 ドレンチ出土陶磁器集計表

出土層位	磁器	陶器	土器	合計
1・2層	33	64	21	118
3層	23	47	26	96
4層	26	64	67	157
5層	2	12	22	36
たちわり	0	2	2	4
合 計	84	189	138	411

4 ドレンチ出土陶磁器集計表

出土層位	磁器	陶器	土器	合計
1・2層	53	70	27	150
3層	31	45	27	103
石列上面	27	31	20	78
4層	22	12	12	46
S D O 1 検出	7	8	10	25
S D O 1 埋上	5	8	9	22
11~13層	5	2	6	13
たちわり	5	7	6	18
合 計	155	183	117	455

図 版



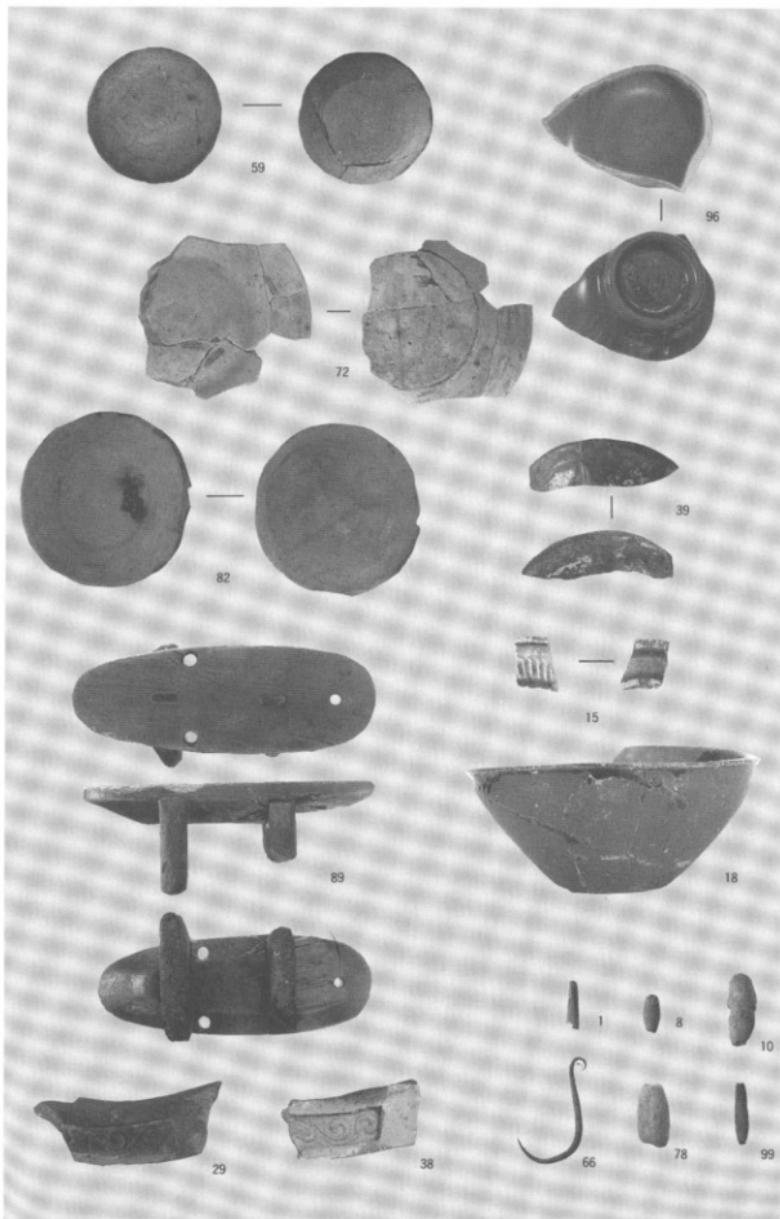
4 トレンチ
石列検出
(南東より)



4 トレンチ
SD 01完掘
(南西より)



5 トレンチ
SD 02完掘
(南西より)



報告書抄録

ふりがな	よなごじょうせき 22いせき						
書名	米子城跡 22遺跡						
図書名							
巻次							
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団発掘調査報告書						
シリーズ番号	27						
編著者名	佐伯純也、下高瑞哉						
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室						
所在地	〒683-0822 鳥取県米子市中町20 TEL(0859)22-7209						
発行年月日	西暦 1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 山町村 遺跡番号	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因
よなごじょうせき 22いせき 米子城跡 22遺跡	とっとりけんよなごし 鳥取県米子市 かもちよう 加茂町	31202 719	35度 25分 27秒	133度 19分 55秒	1997.11.10～ 1998.12.29	130m ²	建設省電線 共同溝建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
米子城跡 22遺跡	城跡	江戸時代	土坑 溝 石列	陶磁器（伊万里、唐津、備前、瀬戸美濃、須佐唐津、在地）、土器、木製品（下駄、箸）、漆器椀、金属製品、須恵器	屋敷の範囲を示す溝を検出。		

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 27

米子城跡 22 遺跡

1998年3月

編集・発行 財団法人米子市教育文化事業団

〒683-0822 烏取県米子市中町20

印 刷 (有)米子プリント社